

サトリの
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗法華経寺住職
日沢是良さん

第107回

「ここの法華経寺は沖縄県に2か寺しかない日蓮宗のお寺の一つで、1981年に開山しました。先代住職の鹿糠亮順は1975年、開教のために単身で沖縄へ。外国人住宅を借りて布教の拠点とし、沖縄全土を行脚しました。そして、布教の一環として非行少年を預かるようになりました。日中は境内の整備をしたり、夜はディスカッション。常時30人くらいの少年がいましたが、その中の一人の少年が親御さんが土地を寄進してくれました。それが今の法華経寺です。実は先代と私は岩手県久慈市の

出身で、幼稚園と高校が一緒の同級生。二人とも実家はお寺ではありませんが、先代は高校生のときに出家していました。私は高校卒業後、東京のお茶屋さんで働いていたものの、どうも自分は商売に向いていないと思っていました。友人である先代の影響もあって身延山の学校に入り、気がついたらお坊さんになっていました。

世間的な損得を超えた ところに尊いものがある

2006年に先代が亡くなり、私が2代目住職になりました。今は保護観察所から「自立準備ホーム」として委託を受けて、少年院や刑務所を出た人たちも受け入れています。ただし、私は指導などできません。私の力の及ぶところではない。ただ支えているつもりが支えられ、俱ともにあることは間違いない。お互いが共鳴し合うことで一人一人の心が開き、次々と連鎖反応が起きる。そこにこそ学びがあると思っています。

ここで送るのは単なる団体生活ではなく家族の生活。同じ釜の飯を食べることで何年も前から一緒にいる家族のような感覚になります。そして、ここはただ飯を食って寝るところではありません。お寺ですから祈りがあります。ただの祈りではない。俱にお題目を唱えさせていただくことが第一に尊いことだと考えています。社会復帰は二の次。ここでの生活を通して



沖縄県那覇市にある法華経寺。この地は第二次世界大戦末期、日米両軍に多数の犠牲者を出した激戦地。毎年5月には立正平和慰霊行脚が行われる。

かつての寮生が教えてくれた お金より価値のあること

このお寺で修行するのは沖縄の人だけではありません。全国からやって来ます。これまでに800人以上を受け入れ、そのうち30人以上が出家しました。先日、約25年ぶりに訪ねて来た男性がいます。数日前に刑務所を出たと言います。「お世話になりました」と。これは嬉しかった。「出世払い」などと言いますが、お金などいらない、顔を見せてくれるだけでいい。これはどんなにお金より価値があります。私も大きな力をもらいました。型にはまらない、こうした活動をこれからも続けていきたいと思っています。さまざま人間模様の中で人生のドラマを演じてきた人たちが俱に暮らし、俱に祈る。社会復帰以上に大切なことを学ぶ姿が私を支えてもっています。

祈りのある生活を通して 大切なことを学んでほしい

ひざわ・ぜりょう 1948年生まれ、岩手県出身。地元の高校を卒業後、東京で就職。10年ほど勤務した後、29歳で出家得度。身延山大学を経て立正大学へ編入、卒業。1980年に沖縄へ。2007年より法華経寺住職。保護司。約40年にわたり非行少年や修行を志す人を受け入れ、共同生活を送る活動に尽力。一般の人に向けた人生相談やカウンセリングも行っている。